

氏名(本籍)	副島正光(佐賀県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第498号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	般若經典の基礎的研究, 統般若經典の基礎的研究
主査	筑波大学教授 文学博士 高橋 進
副査	筑波大学教授 文学博士 川崎 信定
副査	筑波大学教授 広 神 清
副査	筑波大学教授 奈 良 博 順

論 文 の 要 旨

本論文は、『般若經典の基礎的研究』(以下正篇という)と『統般若經典の基礎的研究』(以下統篇という)の二部に分けられる。正篇は既に文部省研究成果刊行費を与えられ著書として印刷公刊(昭和55年2月, 春秋社)しており, 統篇はその後の昭和57年より同62年に至る間の継続的研究成果を好評した学術論文9篇によって構成されている。本論文は, 研究上二つの目的を持っており, 一つは般若經典に関するサンスクリット原典を中心とした読みやすいテキストのための資料の提供と, サンスクリット原典からの現代日本語訳を行うこと, 他は般若經典における思想の解明を行うことである。著者は, 全般般若經典を大部般若經典と小部般若經典に分け, 前者からは『二万五千頌般若』(Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā)を取り上げ, ダット(Dutt)校訂梵本と漢訳本(鳩摩羅什訳, 玄奘訳の二本)を対象させ, 合わせて梵本の和訳を行い, また, 小部般若經典からは『般若心経』(Prajñāpāramitā-hṛdaya)を取り上げ, 同様の目的・方法に従って梵本・漢訳本・西藏訳本の三本を対照し, 合わせて梵文和訳を行っている。また, 統編では、『仏説帝釈般若波羅蜜多心経』(Kauśikaprijñāpāramitā)を取り上げ, 同様の研究を行っている。

第二の般若經典の思想の解明では, 正篇, 統編で取り上げた個々の般若經典における基本的な思想の特質・構造を明らかにしているが, その際特に著者は倫理的視点からの仏教思想の究明に努めている。統編における『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経』を扱った「Mañjuśrīparivarivartāparyāyā Saptasatikā Prajñāpāramitāの考察」は, 特に倫理的視点から体系的に論述されたものである。

論文全体の構成は, 正篇では序論及び本論と結論に分け, 本論は第一部を2篇7章に, 第二部を

4章に、第三部を3篇5章に分けて構成し、索引等を含めて約550ページに及び、続編は9篇の学術論文をもって構成している。

序論では本研究の目的を述べ、次いで資料に関しては、全般若經典を大部般若經典と小部般若經典の二部に分け、梵本、漢訳、西藏訳資料の全てを挙げ、最後に全般若經典の相互関係を一覧表にまとめて示している。研究方法では、資料の整理・提供に関する方法として、梵漢（一部は梵漢蔵）を対照させ、次いで梵文和訳をし、特に資料の正確な解説を第一として根本的な思想の解明を行うこととしている。最後に般若經典の研究史を概観し先行研究における解明点と未解決の課題（初期般若經典の成立事情、般若經典全体の成立順序等）を整理している。

本論第一部「大部般若經典の研究」では、『二万五千頌般若』を大部般若經典を代表する中心經典として取り上げ、その思想解明と資料の提供を行っている。第一篇「思想」では、根本思想として「般若」(prajñā)と「空」(śūnyatā)を、実践思想として「六つの完成」(ṣaṭpāramitā)を取り上げる。般若經典の位相内容は多様であるが、著者はこの三思想の解明を中心に詳述し、「般若」を「無分別智」(avikalpajñāna)の訳語をもって充てるを最適とし、それは物事を分別しない智恵で、分別智(vijñāna)に対するものであることを論証する。「空」は、「般若」が智的側面から捉えられた語であるのに対して、理的側面から述べた語で、それは時空に亘る原理であり「無常」と「縁起」を兼ねた術語となっていることを、經典自体及び龍樹(Nāgārjuna)の注釈等を総合して考察論証している。「六つの完成」は、理想とする「施・戒・精進・忍耐・禪定・無分別智」の完成をその内容とし、著者はここに悟りにつながる宗教性と理想的な日常生活につながる倫理性との総合をみることができるとする。

第二篇「資料」は、『二万五千頌般若』を節単位に分け、梵文と漢訳(鳩摩羅什訳と玄奘訳の二本)を対照させて読み易いテキストを作成し、更に梵文原典からの和訳を行っており、この研究作業は続編の第一から第六論文まで継続されている。

第二部「小部般若經典の研究」では、般若經典成立史上の初期の代表として『金剛般若經』(Vajracchedikā Prajñāpāramitā)を、中期の代表として『般若心經』を、後期は『百五十頌般若』(Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā)を、その他2～3の般若經典を取り上げ、個々の經典に即して思想の考察と資料の提供を行っている。第一章「般若心經の研究」は思想の諸方面からの考察のほか、梵漢蔵対照原文及び同語彙索引を作成し、梵文和訳を行っている。第二章「『金剛般若經』の研究」では、主として同經における「A an-A」(AはAでない)の論理を解明し、それが物事の真相に迫るために工夫された論理であり、存在論・認識論・実践哲学に適用されるものであることを論証する。第三章「『百五十頌般若』の研究」では、それが密教の先駆をなす經典であることを論証し、第四章ではその他の經典として、『仏説仏母小字般若波羅蜜多經』と『仏説帝釈般若波羅蜜多心經』を取り上げ、その思想的特性を述べ、続編でも継続して梵漢対照及び梵文和訳を行っている。続編の第8論文『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』の研究はこれに関連するもので、般若經典は倫理の根柢を、著者の新造語による「無分別智語分別智」に置くとし、絶対的な価値を立てず、靈魂の不滅も説かず、それらのことを承認した上で自由・平等・協調の倫理的世界を積極的に建設しようと

していることを論述する。

第三部「般若經典のインド仏教思想史上における位置づけ」では、第一篇、第二篇を通じて、般若經典と社会的基礎との関係及びインド思想史上の位置づけを論じ、特にバラモン教の中心的一者からの流出的思考傾向、ジャイナ教の複数の要素をたてる要素的思考傾向に対して、仏教が一切を相依相関的にみる縁起的思考傾向にその思想的特質をもつことを論じている。第三篇は第三部の中心をなす論述で、著書はインド仏教思想の大きな流れとそこにおける般若經典の位置づけを考え、第一の部派仏教育→第1の大乗仏教、第二の部派仏教→第二の大乗仏教という流れがあるとしている。第一の系統は無分別智を重視し、縁起、無自性、空並びにその同義的語・句・文を主張し、第二の系統は分別智的傾向が残り、心に迷いがある間は、という条件付きではあるが、輪廻的発想を示していたとする。般若經典は（厳密には初期般若經典）、第一の系統の延長線上にある思想として位置付けられ、第一の大乗仏教の代表的なものともみられることを論証する。

結論は、本論を要約し、般若經典における思想の特質を整理し、特に悟りに通ずる宗教性と、理想の人倫的世界を目指す倫理性との総合として捉えられることを強調している。

審 査 の 要 旨

般若經典は量的に龐大なもので、資料的には未整理・未校訂で完全なテキストもなく、サンスクリット原典、漢訳、西藏訳に分かれている。根本資料ともいえる梵文原典については、大部般若經でも分量的に第一・第二を占める『十万頌般若』も『二万五千頌般若』も未だ還元なる刊本がなく、原典研究は必ずしも十分でない。然るところ、著者は般若經典中でも主要な位置を占める『二万五千頌般若』に対して世界で初めて梵漢対照原文並びに梵文和訳を行い、『般若心經』に対しては梵漢蔵対照原文並びに梵文和訳と梵漢蔵対照語彙索引を作成し、更に『仏説帝釈般若波羅蜜多心經』に対する梵漢対照テキスト並びに梵文和訳を行っており、このことは、著者の長年にわたる努力と精密な研究の成果であって、国内外の学界に貢献するところ極めて大である。また、著者は倫理学先行の研究者として、般若拠点の根本思想を厳密な資料の校訂等に基づく解明に努めただけでなく、その理想的な日常生活につながる倫理的体系的思想としての特性をも明らかにすることに努めており、仏教思想の倫理学的研究の上でも、関係学界に寄与するところが大きいものと認められる。

しかしながら他面において、著者が般若經典を大部般若經典と小部般若經典に分けた根拠・意義等の説明が不十分であること、大乘仏教が在家仏教集団より興ったとする平川説を、著者の般若經典の研究の立場から支持しそれを強調しているが、般若經典自体を在家仏教經典的正確のものだけみることができるか、むしろ禪定經典としての性格も認められないのか、六つの完成のうら、施だけを重視せず他の五つも総合してみる必要があること、倫理学的研究も標榜するならば、「倫理」「倫理性」等の用語の概念規定も明確にしておく必要があること、倫理と宗教の関連性の倫理的考察は困難な問題があるが、なお努力を要すること、先行研究と自との創意を明確にすべきこと、等々は仏教思想の倫理学的体系的叙述とともに今後の著者の研究に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば著者の長年にわたる真摯にして緻密な研究の営為・努力の成果は、学界に貢献するところ大であると認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。